

エコツーリズムの理想と現実 －保護と開発の両立を求めて－

小鳥居 伸 介

The Idea and the Reality of Ecotourism: In Search of Reconcilability of Conservation and Development

KOTORII Shinsuke

Abstract

In this essay we will try to examine some aspects of ecotourism from the viewpoint of reconcilability of conservation and development.

First, a definition and development of ecotourism is shown and its characteristics are demonstrated. Ecotourism is a kind of tourism bound for the realization of the conservation of natural environment and the sustainable development. This objective gave ecotourism its unique character in comparison with other types of tourism. As an example of this, an ecotour in Borneo is examined in detail.

Second, some effects and limitations of ecotourism are explicated and its possibilities and inherent problems are analyzed from the viewpoint of reconcilability of conservation and development. Ecotourism has some advantages in the realization of this aim. Because it is basically a type of tourism, ecotourism can involve wider social spheres than other types of conservation activities and development assistances, such as local communities in developing countries, NGOs or corporations, and naturalist societies or individuals in developed countries. On the other hand, ecotourism has some limitations because its share in the world tourism is still very small by now. And furthermore we must say that it is essentially difficult task because of its contradictory nature in the reconcilability of conservation and development. In order to realize this task, we need some time and efforts in many ways. Nevertheless, we must say that ecotourism has great possibilities to transform unequal structures of world tourism and make better future of global society.

At the conclusion of this essay, we will give some implications extracted from these enterprises. We should not forget that ecotourism is as much a social movement as an economic activity, and we should make continuous effort to realize that goal.

1. はじめに：問題の所在

グローバル化の進展とともに、人類共通の課題として意識されるようになったのが環境問題である。しかしながら、いわゆる南北問題にみられるように、これまで一方的に資源を収奪し、近代化、産業化を進めてきた先進諸国（「北」の国々）が主導的に環境保護を進めようとしても、かつて植民地であり、今日でもなお開発と経済発展を最優先の国家的課題としている発展途上諸国（「南」の国々）との間には、その歴史的経緯も含めて、感情的、利害的な対立が鋭く存在している。1990年代には、

「持続可能な開発（発展）」という、両者の対立を克服しようとするキーワードが一般化した、その実現にあたっては極めて困難な矛盾を多く抱えている。

上記の問題は観光開発という領域においても尖鋭な形で表れている。とくに「南」の国々において、観光は経済発展のための重要な手段として認識され、観光開発のために貴重な自然環境や伝統的な地域文化が破壊されてしまうケースもみられる。こうした問題を解決し、環境保全を図りつつ、地域の経済発展を維持する、「持続可能な観光」の手段として注目されるようになってきたのが、いわゆる「エコツーリズム（エコツアー）」である。

本稿では近年、こうした環境保護と観光開発の両立のための有効な手段として、日本でも注目されるようになってきたエコツーリズムの理想と現実について考察する。まず、その定義および特徴を概観し、エコツーリズムの特質と課題について検討する。次に、筆者が2011年8月に参加したマレーシア・ボルネオエコツアーの事例をとりあげ、保護と開発の両立可能性の観点から、その利点および問題点について検討し、グローバル社会の中でのエコツーリズムという実践の持つ含意および目指すべき目標について考察する。

2. エコツーリズムとは何か：その定義と特徴

エコツーリズムという言葉が登場したのは地球規模での自然・環境保護の必要性、緊急性が意識されるようになった1980年代初頭のことである。エコツーリズム(ecotourism)とは、エコシステム(生態系 ecosystem) またはエコロジー(環境学、生態学 ecology)の「エコ」と観光旅行、観光事業を意味する「ツーリズム」(tourism)を組み合わせた合成語である。もともとはこの語に先立ち「エコツアー」という言葉と実践が存在し、後から作られたのがエコツーリズムという言葉である。エコツアーという言葉を考案したツアーリストたちは、できるだけ環境に対して負荷をかけずに旅行することを目指した。彼らは少人数で移動し、ゴミを持ち帰り、燃料を持参するスタイルを提唱し、そのような旅人をエコツアーリストと名付けた¹。

しかしながら、しばしばエコツアーの対象となる熱帯地方の自然保護地域では、豊かな自然資源を持ちながら経済的貧困のために十分な資源の保全を図ることができず、資源の切り売りに生計を委ねざるを得ない場合が多い。こうした問題を解決する手段として、自然保護の立場から提唱されたのがエコツーリズムであった。WWFは自然保護の観点からエコツーリズムを次のように定義している。

「エコツーリズムとは、①保護地域のための資金を作り出し、②地域社会の雇用を創出し、③環境教育を提供することにより、自然保護に貢献する自然志向型の観光である²。」この定義には、自然保護と地域住民の経済生活の両立という、エコツーリズムの本質的な課題が示されている。

観光業界でも、1980年代、世界観光機関(UNWTO)や国連環境計画(UNEP)による「環境と観光に関する共同宣言」等により、観光事業が訪問先の地域の自然や文化の保全に責任があることが示された。アメリカ旅行業界団体は、エコツーリズムについて次のように所属団体に通達している。「エコツーリズムは、環境との調和を重視した旅行、すなわち野生の自然そのものや環境を破壊せずに自然や文化を楽しむことを目的としている³。」観光事業者にとって、エコツーリズムもビジネスの手段であるが、地域資源の保全と維持は、そのビジネスの持続のために欠かせない条件である。

自然保護団体や観光業界にとってのエコツーリズムの考え方は以上のとおりであるが、ツアーの消

費者である観光者にとって、エコツーリズムの考え方に基づくエコツアーとはどんなものだろうか。エコツアーの会社を営み、エコツーリズム研究者でもあるリチャード・ライエルは、次のようにエコツアーを定義している。「その地域の文化及び環境を作り上げてきたナチュラルヒストリーに対する理解を生み、生態系を損なわないことへの配慮を強調するという明確な目的をもった、自然地域への旅であり、その経済効果によってその原生的な環境の保全に貢献するものである⁴。」この定義では少人数であるということは触れられていないが、自然への理解と経済効果による環境保全という目的を実現しようとすれば、自ずと少人数で環境に負荷を与えない形で行うツアーに収斂されていく。この点で平均的な内容で、だれにも満足を与えようとする、多人数に対応したマスツーリズムとは違うことが分かる。

ところで、エコツーリズムは、以上のような観光事業者や観光者など利用する側へのサービスに主目的を置くのではなく、あくまでも地域資源の持続的な保全と利用を目標としていることにその特徴がある。その手段として、観光を通じた地域振興が図られている。例えば西表島のエコツーリズム資源調査に基づいて、環境庁は1992年、日本におけるエコツーリズムを次のように定義した。「(前略)わが国の各地域固有の自然と、その中で生活する地域住民と自然との関わりから生まれた文化資源について、それらとの接し方を含めてガイドを提供し、旅行者が地域の自然・文化への深い理解を得るとともに、自然保護意識の高揚や人間形成を図る(中略)。さらに、その活動による環境に対する影響を最小限にとどめ、かつその収益が地域の環境保護のために貢献するしくみをもつ旅行⁵。」この定義では、地域の保全が地域振興の目標そのものとなっていることが分かる。

以上を踏まえ、日本全国へのエコツーリズムの普及を目指して、エコツーリズム推進協会は1999年にエコツーリズムを以下のように定義している。

エコツーリズムとは、①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理による保護・保全をはかること。③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。(中略・上記に加えて)環境の保全を図りながら観光資源としての魅力を享受し、地域への関心を深め理解を高めてもらうための手段としてのプログラムがつくられるべきであり、地域・自然・文化と旅行者の仲介者(インタープリテーションの能力を持ったガイド)が存在することが望ましい⁶。

エコツーリズムとは、このような多面的な要素からなる一つの理念である。ここまで見てきたように様々な表現があるのは、自然保護、観光、地域振興など、各者がそれぞれの立場から咀嚼して表しているためである。

ところで、エコツーリズムを観光史の中で位置付けるならば、いわゆるマスツーリズムに対する「もう一つの観光(オルタナティブ・ツーリズム)」とみなすことができる⁷。それまでの大量送客・大量消費に基盤を置くスタイルから、地域の個性、観光客の志向など「個」を基本単位として観光者と訪問先を結ぶスタイルへと大きなパラダイムシフトを促した。

エコツアーは個の志向に基づく「スペシャル・インタレスト・ツアー(SIT)」に分類され、環境保全に責任を持ち(リ spons ible・ツーリズム)、箱モノやレジャー施設に依存しないソフトツー

リズムである⁸。

エコツーリズムにおける体験の対象は様々であるが、世界自然遺産や国立公園などの自然資源をベースとするツアー（ネイチャーツーリズム）、里地里山里海のように地域の生活や農林漁業などを体験するツアー（ルーラルツーリズム、グリーンツーリズム、ブルーツーリズム、フォレストツーリズムなど）、集落がベースとして取り組む生活観光（コミュニティベースドツーリズム）がある⁹。アドベンチャーツーリズムの性格が強い場合もある。日本を含む世界において実践されているエコツーリズムには、上記の様々なタイプが組み合わされている。

1992年にリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）の中心テーマであるサステイナブル・ディベロップメント（持続可能な開発）は、観光業界にも影響を及ぼし、2002年は国際エコツーリズム年とされ、エコツーリズム推進のきっかけとなった。このことから、エコツーリズムはより包括的な「サステイナブル・ツーリズム」にくくられることが多くなった。国連世界観光機関（UNWTO）は、サステイナブル・ツーリズムを次のように定義する。

持続可能な観光開発の指針と管理の実践は、マス・ツーリズムやさまざまなニッチマーケット向けの観光を含む、あらゆるタイプの旅行目的地でのあらゆる形態の観光に適用することができる。

持続可能性の原理は、観光の発展における環境、経済、社会文化の側面に関わっている。永続的な持続可能性を担保するためには、これら三つの次元の間に適切なバランスがとられていなければならない。したがって、持続可能な観光には以下の三つの要件が求められる。

- （1）環境資源を最適に利用しなければならない。
- （2）ホスト・コミュニティの社会文化的真正性を尊重しなければならない。
- （3）長期間にわたり存続可能な経済活動を保障しなければならない¹⁰。

エコツーリズムとは、あらゆる観光形態の中でも、このような持続可能性へのもっとも強い志向を体現する観光であるといえよう。さて、次章ではこうしたエコツーリズムの実例として、筆者が2011年8月24日～31日に体験したボルネオ・エコツアーの事例を取り上げ、エコツーリズムの理念と実践の対応について検討してみよう。

3. エコツーリズムの事例分析：ボルネオ・エコツアーの体験から

マレーシアのボルネオ島北部に位置するサバ州では今日、豊富な熱帯雨林の自然を活かした多種多様なエコツアーが行われている。そうした数あるエコツアーの中で今回筆者が参加したのは、様々なエコツアーを専門的に扱う日本エコプランニングサービス社（JEPS）が企画する「マレーシア・ボルネオエコツアー」である¹¹。

案内のチラシに書かれたツアーの目的は、「熱帯雨林の伐採が進む地で、環境保全や野生生物保護の現状を学び、少数民族の生活を体験する」というものである。前章で取り上げたエコツアーのタイプとしては、ネイチャーツーリズム、グリーンツーリズム、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの組み合わせとなっている。ツアーの参加者は大学生を中心とする20代の青年が多い。

さらにチラシの文面には以下のように書かれている。

「伐採される熱帯雨林、それは『環境に良い』といわれるパームオイルのプランテーションを造るための伐採です。是非を問うには複雑な面が多々ありますが、伐採によって人々や動植物の生活が脅かされていることは厳然たる事実です。」

「このツアーではそんなボルネオ島の現状をいくつかの角度から体験・学習し、実践につなげる方法を各自のテーマとして持ち帰っていただくことを目的に企画されました。」

「このツアーは

○青年海外協力隊の環境保全活動への参加

○野生動物保護施設の見学

を通して専門家から現状を学び、その後いよいよ...

○熱帯湿地林に住む少数民族村での生活体験

というプログラムになっています。」

「特に、訪れるダガット村は、村の人々が生活することで伐採が食い止められ、保護区を存続させる役割を担っている貴重な場所です。村での生活を体験することがそのまま直接の支援となり、あなたも地球環境保全の一翼を担うことができるのです。村人たちのやさしさに包まれながら、ゆったりと流れる時間の中で、かけがえのない体験と学びができると確信しています。」

以上のように、このツアーは環境教育、環境保全、地域振興の目的を持つエコツーリズムの理念に従ってプログラムされている。前章でも見たようにエコツーリズムには様々な目的があるが、とくにこのツアーは環境教育的な側面が強いことが上記の文面や、筆者自身が実際参加した印象からもうかがえる。

今回のツアー参加人数は筆者も含めて全部で10名である。このツアーは2003年から毎年3回ずつ開催されているが、参加人数は毎回おおむね10～20名程度であり、リピーターもいる。年齢層は20代前半の大学生が中心である。今回のツアーも筆者を除いて全員が大学生あるいは大学院生であった。エコツアーには現地の自然・社会・文化に通じたガイド（インタープリター）が必須であるが、このツアーでは日本人とマレーシア人（正確にはサバ州の民族集団の一つであるカダザン人）のハーフの男性ガイドが付いている。彼はサバ州に在住する専門ガイドで、日本語・現地語が堪能で現地事情にも通じ、毎回このツアーのガイドを務めているので、訪問先の人々との関係も良好である。ツアー参加者は彼の案内のもとで、安心してツアーを楽しむことができた。

次に、実際のツアーの流れを時系列に沿ってまとめてみよう。

8月24日（1日目） コタキナバル着

*コタキナバルはサバ州の州都で、エコツアーの出発地となる。日本（成田、関空）からクアラルンプールを経由してコタキナバルに到着後、市内のホテルに投宿。翌朝から活動開始である。

8月25日（2日目） コタキナバルからサンダカンへ

*午前中、コタキナバル市内の湿地センターを訪問。ここは市内に残された24ヘクタールのマングローブ林の湿地帯に1.5kmのプランクウォークが設けられており、野鳥や魚の生態を観察できる

ようになっている。鳥や魚の名前が示された案内も掲示されている。このセンターに派遣されている青年海外協力隊員とセンター常駐の職員の案内・解説により、様々なマングローブ、シラサギ、カワセミなどの野鳥、トビハゼ、カニなどの観察を行う。同時に、開発によるマングローブ林の減少や環境保全の取り組みについてレクチャーを受ける。参加者は職員や参加者同士と議論しながら、マングローブ林と自然保護の問題について認識を深めた。

*午後、コタキナバル郊外のロッカウィ・ワイルドライフパークを訪問。ここはコタキナバルの中心から南東へ約 25km の郊外にある、サバ州野生動物保護局が運営する動物園で、広大な敷地を活かし、なだらかな坂道を歩きながら、点在する動物たちを見学できるようになっている。オランウータン、テングザル、ボルネオゾウなどボルネオ島固有種やトラ、マレーグマ、ウンピョウ、ホーンビルなど多数の動物を間近で観察できる。野生の状態では観察が難しい固有種が多く、ボルネオの自然の豊かさをコンパクトに集約して体感できる場所として、価値のある場所である。

*夕刻、空路でコタキナバルからサンダカンへ移動後、市内のホテルへ投宿。

8月26日(3日目) サンダカンからダガット村へ

*朝、サンダカンの波止場からボートで3時間ほどかけてダガット村へ移動。ダガット村はサバ州の東南端に位置し、セガマ川という河川を河口から 20 kmほど遡行したところにある、このツアーの目的の中心を占める訪問地である。交通手段は川を遡上するボートしかなく、外部につながる道路はない。この不便さが逆にエコツアーとしての魅力ともなっている。住民はティドン族というイスラム教を信仰する民族集団で、村の人口は仕事で町に出ている人を除いておよそ 30 世帯 200 人。エビ、シジミ漁などの漁業を主たる生業としている。参加者は船着き場の真正面にある村長の家で歓迎を受けた後、それぞれのホームステイ先に 2～3 人ずつ分かれて投宿した。各ホストファミリーには英語を話せる 20 代の若者がいて、ツアー参加者とのコミュニケーションを図ることができる。

*村の散策や若者、子供たちとのレクリエーション、各ステイ先での夕食の後、参加者は村長宅に集まり、村長から村の歴史と概況について、ガイドの通訳を通して話を伺った。以下に記すのはその概略である(カッコ内は筆者による補足)。

この村の住民の先祖は今から 100 年ほど前に現在のインドネシア領カリマンタン(ボルネオ島東南部)から船で現在のマレーシア側サバ州に移住してきた。移住の理由は当時インドネシアを支配していたオランダとの軋轢を逃れるためであった。カリマンタンのティドン族はボルネオ島のあちこちに分散し、この村の住民たちの先祖はその一グループである。この村に定住する前はコタキナバル、サンダカンを経由して 1952 年に現在の村に近い所にあるラボックブルラン村に定住した。しかし、災害(洪水)のためその村を放棄し、1981 年に現在の場所にやってきた。

この村はマレーシア政府の管轄する自然保護区の中にあり、基本的には人間が住んではいけないことになっている。しかし、この地域の固有の自然環境を維持することを条件に居住を許可されており、政府森林局の許可を得て川辺の森を伐採し、開拓した。村人たちは生存していくためには移動することが必要である。これからも現在の場所が住みにくくなってくれば、村人たちの合意によって引越しをすることもあり得る(ティドン族に限らず、ボルネオの諸民族集団においては、村や家族などの集団による移住あるいは個人単位での出稼ぎなどの移動は珍しいことではない)。

この村はジャングルの中にあり、周辺に生息する野生のブタやサルなどにすぐに食べられてしま

うため、野菜やコメは村で作らず、週に1回、ボートと陸路で3時間ほどのところにあるラハダトゥという町に行ってまとめ買いする。村人の生活の基本は漁業で、現金収入は主にシジミやエビを町の市場で売って得られる。

小学校に通う子供たちは、この村からは学校が遠いので、学校に通える場所にダガット村の分校を作り、学校がある時は世話をする母親たちと一緒にそちらで暮らし、休みになると本村に帰ってくる。中学校や高等学校は町に行かないとないので、やはり学校に通うためにその年齢の子供たちはラハダトゥやサンダカンに行き、学校がある間はそちらで暮らしている(私たちが訪問した時は、学校は夏休みの期間中だったので、学校に通う子供たちは、大学生の若者も含め、みんな村に帰ってきていたため、村中たいへんにぎやかだった)。

この村の暮らしは決して便利とはいえず、仕事も漁業以外はないので、若者たちのなかには学校を出た後、町で働く者も多い。しかし、それでも村を愛する若者は学校を出た後も村に戻ってきて、漁業に従事している。仕事のため町に住む若者もイスラム教のラマダン(断食月)明けの祭りなど、休みのときには村に帰ってくるので、村はその時は賑やかである(ちょうど今回のツアーは断食明けが間近の時だったので、町に住んでいる人たちも村に帰ってきてはじめていた時だった)。村の外で働く人も、定年後は村に帰ってこなければならないという掟がある(町の暮らしは確かに刺激があるし便利だが、安心できないのに対して、村の暮らしは、不便かもしれないが穏やかで安心である)。

結婚のしきたりは婿入り婚となっている。村の女性が他の民族の男性と結婚すると、その男性は婿として婚家に入ってくる。今までにカダザン族、ブギス族、スルック族の男性が婿入してきた。村の男性が他民族の女性と結婚すると、先方のしきたりに合わせるが、最後は村に帰ってくる(村人たちの血縁的、地縁的な紐帯は、社会の変化が進んできた今日でもなお根強いようである)。

エコツアーを始めたきっかけは、村での生活を維持するためである。近隣の村では本来は違法であるが、油ヤシのプランテーション企業に土地を売ってしまったところが多い。自然環境の保護のために森林局からの要請も受けて、土地を売らずにこの場所で生活するために、2003年からエコツアーの受け入れを始めた。受け入れたツアーは今までのところ、ほとんどが日本エコプランニング社のツアーである。その他には野生生物局の関係でアフリカ、ベトナム、欧米からも訪問があったが、回数は多くない。今のところエコプランニング社のツアーが年に3回で、他はたまにあるだけである。できれば毎月1回ずつくらいはツアーを受け入れたい(エコツアーの受け入れによる収入がいくらになるのかは聞けなかったが、子供たちの学費その他、村の生活を支えるのに大いに役立っているようである)。

以上が村長から伺った話の内容である。村長は1934年生まれで2011年の現在で77歳になる。村長の任期などは決まっておらず、病気や死亡、高齢により引退する時が交代の時期になる。新しい村長を決めるのは慣例的に村全体の話し合いで決めるとのことである。村長が語った村の歴史についての話は、口承で伝えられてきたものである。話の中からこの村の暮らしを維持することの困難さや、エコツアーという村人にとって新しい試みへの人々の期待がうかがわれた。

ところで、エコツアーの実施のためには、旅行会社との折衝やアクティビティの企画・運営、ホームステイの受け入れ態勢の整備など、様々な準備が必要となってくる。私たちのツアーガイド氏の説明によれば、エコツアーを積極的に受け入れようと決断するに当たっては、20代の若者たちの意見

が大きかったらしい。筆者がお世話になったホームステイ先にも、英語を話せる、高等教育を受けた若者がいて、私たちへの対応をしてくれた。この後に記す村での様々なアクティビティも、こうした若者たちが積極的にかかわり、運営しているのである。

8月27日(4日目) ダガット村

*この日は終日、村とその周辺でのアクティビティを行う。午前中はニッパヤシの工芸を村人から学んだ。ニッパヤシは村の周辺の川岸に自生するヤシの一種で、かごや飾り物など、様々な工芸品作りに活用されている。こうしたヤシを日常生活の用途の範囲内に使うことは環境の維持に影響はほとんどないので、許容されている。こうした工芸品は土産物としても価値があるが、エコツーリズムではあくまでも村人の生業活動を体験するという名目で、参加者は村人の助けを借りて作ったものを一つか二つ、持ち帰ることができる。

*午後は村人たちの案内で、村の近くの漁場で、エビ漁とシジミ採りを体験させてもらった。これも生計維持のために許可された活動であり、ツアーの中で体験的に少し採取することは許容される。採ることができたエビやシジミはステイ先に持ち帰って、家の人に料理してもらう。ただしこの時は、シジミは採れたが、エビは採れなかった。こうして、参加者は体験的に漁業の難しさや採れた時の満足感を知ることができる。

*夜は夕食後、ボートに乗って、ナイトクルーズを体験した。川面に顔を出したワニや、クリスマスツリーのようにホテルが群集をなして点滅する樹木など、熱帯雨林地域ならではの自然を体験することができる。

8月28日(5日目) ダガット村

*この日も終日、村とその周辺でのアクティビティで過ごす。朝、6時からボートでモーニングクルーズに出かけた。村の近隣の河岸に上陸して、ジャングルウォークを体験した。ガイド氏によれば、「ジャングル」というのは、原生林ではなく、人間の手により伐採された後で再生した二次林のことである。ここは、この地域にもともと住んでいたスルック族が伐採した後のジャングルということである。ジャングルは原生林と比べると木が低く、草が多い。例外的に高い木があるが、それは非常に硬くて伐採しにくいムンガリスという、板根を持ち、80メートルほどの高さまで生育する木である。この周辺には野生のゾウもいて、私たちが行った時も、ゾウの足跡を見ることができた。案内してくれた村の若者によれば、3日ほど前に通ったゾウの足跡であるとのことだった。ゾウは危険な動物なので、間近にいるとわかった場合は決して上陸してはならないとのことである。ジャングルは土地のことをよく知ったガイドがいなければ入ることができない、エコツアーにおける「聖域」とも言えよう。ボルネオ・エコツアーにおいては、海や島のツアーを除けば、こうしたジャングル・ツアーというのが必ず組み込まれている。ボルネオのエコツアーにおける最大の資源がこの「森林」である。参加者は、ガイドや村の若者たちに、ジャングルウォークの行程で遭遇する野生の動植物の名前や生態をその場で教わりながら、熱帯雨林の自然の豊かさを体感する。

*午後、ボートで村の近くの油ヤシ農園を視察に行く。ダガット村からボートで10分ほどのところに、油ヤシ農園がある。この場所は元来保護区であるが、ダガット村を含めた近隣村落の住民たちは、実際とは違う内容の口約束でだまされて、土地を企業に安く買われてしまい、プランテーションになってしまった。ここに限らず、インドネシア側も含めて、ボルネオ島全体でプランテーションは拡大している。一度プランテーションができてしまうと、大量の農薬が使われ、その影響で農園の周

辺流域の漁獲量が減少し、やがて土地を手放さざるを得なくなる。政府は近隣の住民たちへの補償として、学校に通うことのできる道路に接続する住居を農園の隣に建設中である。政府は熱帯雨林の保全とプランテーションによる経済効果のバランスを取ろうとしているが、油ヤシは経済価値が高いため、ある程度は規制しつつも開発を容認しており、現状では開発にブレーキをかけることは難しい¹²。こうした開発と自然破壊の進む現場である熱帯雨林において、これ以上の環境破壊を防ぎ、環境保護と開発の両立を図る手段がエコツアーである。ダガット村では、エコツアーを実施することで得られる収入により、プランテーションへの土地の転用を防ぎ、持続的な環境の保全をめざしている。漁業を中心とする住民の生活を含めた環境の保護が、住民たちにとってこのツアーの最大の目的である。参加者は油ヤシ農園の現場を見て、ガイド氏から開発と自然破壊の現状を聞くことで、エコツアーへの参加による自然保護の意義を体感することができる。

*夕刻、油ヤシ農園視察後、近隣の河岸の草地で夕食用に野草を採り、村へ帰る。夕食後はお別れパーティで住民たちと交流し、ホームステイのプログラムはこれで終了する。

8月29日（6日目）ダガット村～サンダカン～コタキナバル

*朝、ダガット村をボートで出発し、サンダカンへ昼前に到着。山崎朋子著『サンダカン八番娼館』で有名になった、からゆきさんの眠る日本人墓地にお参りした後、午後、空路コタキナバルへ移動。夕刻、コタキナバル市内を自由に散策した後、参加者全員がそろって、夕食会でツアーを振り返る。

8月30日（7日目）コタキナバル～オプショナルツアー～帰国

*朝、日帰りのオプショナルツアーに出発。今回、2種類のオプショナルツアー（①サピ島でシュノーケリング、②世界遺産・キナバル公園でキャノピーウォーク）が用意されていたが、ツアーの参加者のうち、①が3名、②が4名、残り3名がフリーだった。筆者は②「キナバル公園」を選択した。コタキナバル市内から車で2時間半ほどの距離にあるキナバル公園は、東南アジア最高峰のキナバル山の麓に位置し、敷地の面積は約7万5000ヘクタールに及ぶ、マレーシア初の世界遺産として有名である。この中にあるポーリン温泉の周辺では、木と木の間に渡された地上約40メートルのキャノピーウォークを体験できる。これはボルネオの熱帯雨林のエコツーリズムでは定番ともいえるアクティビティである。参加者は熱帯雨林を高い所から見渡すことによって、樹木の多様性や景観の特徴を把握することができる。また公園内の通路を散策することで、多様な動植物を間近に観察することができる。近隣の村では、世界最大の花として有名なラフレシアを見ることができた。全体として、ボルネオの自然の貴重さが実感できるツアーとなっていた。

*夕刻、コタキナバル市内に戻り、空路帰国の途へ。

*31日朝、日本（成田、関空）到着。ツアー終了。

以上が時系列に沿ったツアーの概要である。次章ではこの事例を中心に、エコツーリズムの意義と課題について考察してみよう。

4. エコツーリズムの意義と課題：自然保護と観光開発の両立可能性の観点から

本章では筆者が参加したマレーシア・ボルネオエコツアーの事例を通して、エコツーリズムとエコツアーについて、いくつかの意義・特徴や課題をあげて、その理想と現実の矛盾や、自然保護と環境

開発の両立可能性について考察してみよう。

本論で取り上げたボルネオ・エコツアーは、すでに述べたように、ツアーの参加者にとっては環境教育的な側面が強い、いわばスタディツアーの一バージョンともいってよいだろう。実際、参加者も学生が主体であり、今回のツアー中に筆者が参加者たちに聞いたところでは、参加の動機も環境問題について体験的に学びたいという答えが多かった。なお、ボランティア活動は、今回参加したツアーには入っていなかったが、ボランティアではなくとも「体験」という要素は重要な構成要素となっていた。同種のツアーには、これまで筆者は NGO 主催の「スタディツアー」への参加という形で経験してきたが、今回のツアーも主催する事業者は NGO ではなく企業ではあるが、ツアーの狙いはほぼ NGO 主催のスタディツアーと重なり、参加者の動機づけの部分でも共通するものがあるといえるだろう¹³。

それでは次に今回の主催事業者の特徴をまとめてみよう。このツアーを企画する日本エコプランニングサービス社（以下、JEPS と標記）のパンフレットによれば、同社は現在まで 27 カ国でツアーを行っており、ツアーのテーマは環境保護、教育支援、農村開発、児童労働防止など多岐にわたる。JEPS の会社案内には、事業内容として、「NGO や NPO の活動に参加するツアーの企画・実施及びコンサルタント」、「企業や団体の社会貢献活動に関するツアーの企画・実施及びコンサルタント」と書かれている¹⁴。また、JEPS の企業理念（JEPS 憲章）には、以下のような文言が掲げられている。

1. 環境保護・希少動植物の保護を行う団体をツアーを通して支援し、その支援が積極的に成されるよう計画し、努力する。
2. 世界中の子どもたちが平和に暮らし、教育の機会を得、労働から解放されるように活動を行う団体をツアーを通して支援し、支援が積極的に成されるよう計画し、努力する。
3. フェアな貿易の推進、弱い立場にいる人々（女性や障害者、少数民族など）の自立支援を行う団体をツアーを通して支援し、支援が積極的に成されるよう計画し、努力する。
4. 自然エネルギー、教育、福祉、街づくりなどに先進的に取り組む国や行政、企業、団体の活動をツアーを通して紹介することで、よりよい日本の社会を築く一助となるよう努力する。
5. 旅を通して社会に貢献を¹⁵！

以上の企業理念に見られるように、JEPS はエコツーリズムを中心とする観光事業を通して、持続可能な発展を目指す、「社会的企業」の一翼を担う存在であるといえよう。これは個々の NGO・NPO だけでは成しえないような、ビジネスを通じた社会貢献の一形態であり、さらに NGO・NPO 的な理念の実現を、それらの団体と連携しながら推進し、達成することを目指す、先進的な意義の高い事業であるといえるだろう。

次に現地のツアー受け入れ団体についてみてみよう。JEPS の案内に見られるように、現地の受け入れ団体は NGO・NPO などが主であるが、今回筆者が参加したツアーでは、中心的には「ダガット村」という、サバ州の一村落が単位であった。JEPS のパンフレットを見ると、こうした村落単位のエコツアーというものがしばしば見られる。この場合も広い意味では「地域のコミュニティ」という形の NGO・NPO が、JEPS の支援・連携のもとでホームステイ・プログラムを運営するエコツーリズム事業の一形態といえるだろう。他のエコツアーと同様、この場合も住民の生計維持活動としての観光事

業が、環境保護と両立しうる形態を継続している一事例ということができる。

以上、手短ではあるが、エコツーリズムの理念と実践について、ツアー参加者、事業者、現地団体における特徴を見てきた。その意義についてはこれまで見てきた通りだが、今回の事例におけるエコツアー実施にあたっての課題としては何があるだろうか。

まず、ツアー参加者についてであるが、ツアーの性質上、学生を中心とする若い世代に偏るという問題がある。若い人が参加すること自体はもちろん良いことではあるが、より広い年齢層にアピールするような企画を立てることが課題といえよう。エコツアー先進国であるオーストラリアや欧米諸国では、ツアーのタイプにもよるが、若者から高齢者まで幅広い層がエコツアーに参加している¹⁶。もちろんそうした国々ではもともと環境保護の意識が高いという理由もあるだろう。日本でもすでに様々な取組が行われてはいるが、これからもっと広くエコツーリズムの理念や意義をアピールしていく必要があるだろう¹⁷。

次に、事業者であるが、今回の JEPS のようなエコツアーの専門業者は日本国内・国外にたくさんあるが、課題の一つはツアーの値段であろう。これは第2章でもふれたが、通常のツアーに比べ、エコツアーは全体に高価格で設定されていて、いかに内容が魅力的でも、高価格であることがハードルになって、結果的に参加者を狭めているように見える¹⁸。ただし、JEPS の場合は通常の NGO などが主催するスタディツアーと大きく変わらないので、若い人たちにも幾分参加しやすいとはいえよう。欧米などではエコツアーはかなり高級感のあるもので、値段はかなり高額に設定されていることが多いようだ。高い値段は、その分だけ環境保全事業や地域住民への投資という形での配慮を示すものともいえる。エコツーリズムは確かにマストツーリズムとは異なり、値段は一般の価格より高くても、それに参加することで環境保全に役立つという満足感がツアー参加への動機となっているのである。この仕組みはフェアトレードにおける価格設定のあり方（ソーシャル・プレミアム）と同じ発想と必要性に基づいているといえよう¹⁹。一概に安ければよいというものではないが、エコツーリズムの普及ということを考えた時に、価格の問題は重要であるといえるだろう。

最後に受け入れ団体についてであるが、エコツアーを受け入れる団体は NGO・NPO、地域コミュニティと様々であるが、受け入れに際しての問題としては、規模と持続性があげられよう。ダガット村のケースでもみられたように、各受け入れ団体は、できるだけ多くの参加者を受け入れることでより多くの収益を上げたいことは間違いない。しかし、エコツアーの性質上、あまり多くの人数を受け入れると、ゴミや排出物の処理、貴重な自然環境へのダメージなど、環境への悪影響が広がり、おのずと受け入れ人数と回数を制約せざるを得ない。そのことが高い価格設定にもつながっている。このように、エコツアーは「エコ」という名を冠したツアーである限りにおいて、環境に配慮したエコツーリズムの理念を守りながら、地域住民への利益もあげなければならないという、環境保全と経済発展の両立をめざす、現実において困難な取り組みであるといえよう。

おわりに：持続可能な未来のために

以上、簡単ではあるが、エコツーリズムの理念と実践における、意義と課題について考察してきた。本論文の冒頭にも述べたように、地球規模の環境破壊が進む中で、環境保護を図りながら、地域の発展も進めるといふ、たがいに相矛盾するような課題を同時に果たそうというのが、エコツアー、エコ

ツーリズムである。その実施においてはすでに見てきたように困難な問題が多いと言わざるを得ないが、それでも「持続可能性」を目指すことは放棄してはならない。100%の環境保全も、100%の経済発展も、現在の地球社会にとっては望ましい選択肢ではない。そうであるならば、われわれはたとえ満足な解決策ではなく、妥協的な措置にしか見えなくても、また「持続可能性」を絵に描いた餅に終わらせないためにも、この取り組みを全面的に否定するのではなく、建設的な批判者というスタンスで支え続け、よりよい地球と人類の未来を目指すべきではないだろうか。

参考文献

ビートン、スー

2002 『エコツーリズム教本 先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド』(小林英俊訳)
平凡社

石弘之

2003 『世界の森林破壊を追う 森と人の歴史と未来』朝日新聞社

j e p s

2008 『こんな旅がしたかった』株式会社日本エコプランニングサービス

海津ゆりえ

2011 「エコツーリズムとはなにか」真板昭夫・石森秀三・海津ゆりえ(編)『エコツーリズムを学ぶ人のために』世界思想社

小林寛子

2002 『エコツーリズムってなに? フレーザー島から始まった挑戦』河出書房新社

小鳥居伸介

2001 「東南アジアの開発／発展における NGO の役割ータイと東ティモールの場合(1)ー」
『長崎外大論叢』第2号

2002 「東南アジアの開発／発展における NGO の役割ータイと東ティモールの場合(2)ー」
『長崎外大論叢』第3号

2004 「社会・文化復興における NGO の役割ーカンボジアの事例からー」『長崎外大論叢』
第8号

2005 「社会開発の実践における諸問題に関する考察ーインドネシアとインドの事例からー」
『長崎外大論叢』第9号

2007 「東南アジア諸国の参加型社会開発に関する比較研究(1)ーカンボジアの事例からー」
『長崎外大論叢』第11号

2008 「東南アジア諸国の参加型社会開発に関する比較研究(2)ーインドネシアの事例からー」
『長崎外大論叢』第12号

2009 「東南アジア諸国の参加型社会開発に関する比較研究(3)ーアジア学院とインドネシア(RDA)の事例ー」『長崎外大論叢』第13号

2010 「フェアトレード試論ー開発援助との比較の視点からー」『長崎外大論叢』第14号

真板昭夫・比田井和子・高梨洋一郎

2010 『宝探しから持続可能な地域づくりへ 日本型エコツーリズムとはなにか』学芸出版社
敷田麻美（編著）

2008 『地域からのエコツーリズム 観光・交流による持続可能な地域づくり』学芸出版社
山下晋司

2007 「エコツーリズムのアイロニー—マレーシア・サバの森と海から」山下晋司（編）
『観光文化学』新曜社

注

¹ [海津 2011、p.22]

² [海津 2011、p.23]

³ [海津 2011、p.23]

⁴ [海津 2011、p.24]

⁵ [海津 2011、p.25]

⁶ [海津 2011、p.26] また、以下のウェブページを参照されたい。[<http://www.ecotourism.gr.jp/what/>]

⁷ [海津 2011、p.27]

⁸ [海津 2011、p.27]

⁹ [海津 2011、p.28]

¹⁰ [海津 2011、p.30]

¹¹ 日本エコプランニングサービス社の概要については、ウェブページ（www.jeps.co.jp）を参照されたい。

¹² 油ヤシのプランテーションをはじめとするボルネオの熱帯雨林破壊の歴史と現状については、[石 2003、pp.54－76]を参照されたい。

¹³ 筆者は2000年から2011年まで、ほぼ毎年、様々なNGOが主催するスタディツアーに参加してきた。その詳細は[小鳥居 2001、2002、2004、2005、2007、2008、2009]を参照されたい。

¹⁴ [jeps 2008]

¹⁵ [jeps 2008]

¹⁶ オーストラリアを中心とする、世界のエコツーリズム事情については[小林 2002]、[ビートン 2002]等を参照されたい。

¹⁷ 日本のエコツーリズムの現状については、[敷田 2008]、[真板ほか 2010]等を参照されたい。

¹⁸ 山下晋司は、マレーシア、サバ州におけるエコツーリズムについて論じる中で、エコツーリズムの価格の高さを指摘している[山下 2007、p.168]。

¹⁹ フェアトレードの現状と問題点については[小鳥居 2010]を参照されたい。

